



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	[書評] 塩月亮子(SHIOTSUKI, R.)著 『沖縄シャーマニズムの近代：聖なる狂気のゆくえ』
Author(s)	浜崎, 盛康
Citation	International journal of Okinawan studies, 3(2): 87-91
Issue Date	2012-12-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/34190">http://hdl.handle.net/20.500.12000/34190</a>
Rights	

## [書 評]

塩月 亮子 (SHIOTSUKI, R.) 著  
『沖繩シャーマニズムの近代—聖なる狂気のゆくえ』  
森話社 2012年 462 ページ

浜 崎 盛 康\*

### はじめに——『沖繩シャーマニズムの近代』の概要

本書は、著者が「2003年に名古屋大学大学院文学研究科へ提出した博士論文『シャーマニズム復興の近代文化論』が骨子となり、今回の刊行にあたり、一遍を削除し、新たに最近の研究成果六編を加え、全体的に大幅な修正・加筆をおこなった。」(p.456)もので、著者の長年に亘るシャーマニズム研究、特にユタ研究が実を結んだ462ページに及ぶ労作である。

本書の構成は、「序論」、第Ⅰ部「シャーマニズム研究史」(第1章～第3章)、第Ⅱ部「沖繩シャーマニズムの社会史」(第4章～第9章)、第Ⅲ部「村落共同体のなかの沖繩シャーマニズム」(第10章～第16章)、第Ⅳ部「沖繩シャーマニズムの新たな諸相」(第17章～第24章)、「結論」となっている。

以下、紙幅の関係上本書の「目的」を中心に検討し、そしてその他若干の評言を付したい。

### I. 本書の目的とその検討

#### 1. 本書の目的

本書の目的について、「一 目的と意義」(pp.9-10)を中心に、「まえがき」(pp.7-8)も併せて要点を整理すると、大きく次の二つになるだろう。

目的1: 世界的な「シャーマニズム復興」現象は、従来のシャーマニズム研究(本質論や類型論等)では説明できない。そこで、本書は、1-a 沖繩を例として現代のシャーマニズムの様相を概観し、1-b シャーマニズム復興の理由を明らかにし、1-c シャーマニズム復興現象が近代社会(あるいは近代化)の中で持つ意味を明らかにし、1-d 「近代化における非宗教性・合理性のもとに宗教生活は細っていく」という世俗化論を否定し、それは生成・持続するのだという近代文化論を提示するものである。

目的2: 以上の考察を通して、「近代とは何か」について明らかにすることが、本書の最終的な目的である。」

本書の目的について、本稿では便宜的に以上の様に大きく二つに整理して検討したい(もっとも、沖繩のユタ・シャーマニズム研究(1-a)は、「近代文化論」の提示のための手段というニュアンスもあるように思われるが)。

#### 2. 本書の目的について

##### (1) 「目的1」について

##### 1) 「1-a 沖繩を例として現代のシャーマニズムの様相を概観」について

著者は沖繩、特に国頭郡本部町字備瀬を中心に、約23年間にも及ぶ断続的な現地調査を徹底し

\* 琉球大学教授 Professor, University of the Ryukyus

で行っている。その結果については主に第10章から第16章にかけて考察が行われており、備瀬出身の「ユタの活動状況」や「村落の宗教構造がもたらす神人(村落祭司)のユタ化」等、「村落共同体のなかの沖縄シャーマニズム」が(備瀬という一地域を中心としたものではあるが)十分に浮き彫りになっている。

また新しい動きとして、ユタがカウンセラーによって肯定的に評価され、映画や文学の領域においても「沖縄的なもの」の表象として(p.91)積極的に取り上げられるようになった状況(第5章、第6章、第7章)、ユタの世界観の拡大(第19章)とニューエイジ文化の受容と活用(第20章)、「自助的ネットワークの出現」(第21章)、そして、ネオ・シャーマニズムと比較しながら、インターネット上の「場」に集まると同時にシャーマニズムが生まれ根付いている「現地(「ローカリティ」)の重視について(第22章)、「霊能学校」の開設(第23章)、聖地の観光資源化(第24章)等が紹介されている。

以上のような記述によって、ユタが近年肯定的に評価されるようになり、新しく様々な形で展開している状況がよく見えてくる。シャーマニズムに関する「動態的視点を重視した通時的分析」という本書の独自のアプローチが、その成果をあげたものと言えよう<sup>1)</sup>。「沖縄を例として現代のシャーマニズムの様相を概観」という目的は、十分に果たされていると言えよう。

2) 「1-b シャーマニズム復興の理由を明らかに」する、について

「シャーマニズム復興の理由(「要因」)」は、「結論」を中心に要点を整理すると、次の4つである。① 憑依などにみられる「非一貫性」・「超自我性」・「柔軟性」(pp.428-429)。② 己の神や精霊のみを信じることからくる「超国家性」・「反体制性」・「脱制度性」・「超地域性」(p.428 pp.429-430)。③ 権力側とは対極の、庶民の気持ちを代弁する「民衆性」(p.428 p.431)。④ 死後の世界や神の住む世界などを重んじる「あの世性」(p.428 pp.431-432)。

以上の四つは概ね首肯できるものであるが、以下の諸点は気になるところである。①の「非一貫性」は、災因の指摘と除去の関連で重要性を持つものであるように思われる。しかし、そうであれば、「非一貫性」はシャーマニズム復興の直接的な要因ではなく、むしろ災因に対して柔軟に対応することによって「クライアントのニーズに答えている」という点が直接的で重要であるということになるのではないだろうか。②の神人のユタ化は、神人の(ユタではなく)「脱制度性」なのではないだろうか。④については、著者も指摘しているように(p.431)、カウンセリングでは「あの世」を提示できない。したがって、ユタはカウンセラーというよりもスピリチュアルケアワーカーという方がより適切である<sup>2)</sup>。

3) 「1-c シャーマニズム復興現象が近代社会(あるいは近代化)の中で持つ意味を明らかに」する、について

本書では、沖縄における「シャーマニズム復興」を「近代化の中に位置付け直すという全く新しい試み」(p.426)がなされている。これが「1-c シャーマニズム復興現象が近代社会(あるいは近代化)の中で持つ意味を明らかに」するということと関連しているようである。近代化で「非一貫性」・「超自我性」・「柔軟性」、「超国家性」・「反体制性」・「脱制度性」・「超地域性」、「民衆性」、「あの世性」が否定され、反対の「一貫性」、「国家中心性」、「官僚制」、「体制性」、「この世性」などが重視されてきた(pp.434-435)。しかし、近代化が行き詰まりをみせるなか、シャーマニズムは、現在、「カウンセリングの一種で癒しをもたらす宗教の望ましい形態、あるいは民族アイデンティティの表象として復活」(p.427, p.434)してきている、と述べられている。つまり、近代化における否定と行き詰まり、そして否定したものの復興へという流れに、シャーマニズムの復興という現象を位置付けることによって、近代が否定してきた諸特徴(これはシャーマニズム復興の諸

要因でもあるとされる)が、「近代化の中に」位置付け直されたということであろう。そして(関連して)、「1-c シャーマニズム復興現象が近代社会(あるいは近代化)の中で持つ意味」とは、著者は「われわれが今後、近代化のマイナス面をいかに克服し、どのような価値を打ち立て、どの方向に進んでいったらよいのかということに対する、重要な示唆を与えてくれる。」(p.434)ということであり、その「重要な示唆」とは、既に見た(特にp.434)「カウンセリングの一種で癒しをもたらす宗教の望ましい形態、あるいは民族アイデンティティの表象として復活」ということのようにある。しかしそうであれば、そのようなものとして、シャーマニズムは「近代を逆照射する説明原理、または反省を促す対抗装置」(p.112)として位置付けられるものでもあり、重要であるだけに「重要な示唆」についてももう少しまとまった詳しい議論が欲しいところであった。

4) 「1-d 近代化における非宗教性・合理性のもとに宗教生活は細っていくという世俗化論を否定し、それは生成・持続するのだという近代文化論を提示」、について

周知のように、世俗化論そのものがこれに対する批判も含めて既に多くの議論を経てきており、それをあらためて「否定」しようというわけであるから、世俗化論そのものとその批判について、またここで言う「宗教」や「宗教生活」あるいは「細る」が何を意味するか等についてしっかり論じ(本書では、わずかに序論の注[3]でP.Lバーガーに触れているのみである)、本書の「世俗化論の否定」と「近代文化論の提示」の意義を示す必要があっただろう。

(2) 「目的2」について

本書が明らかにしたとする「近代とは何か」は、「結論」において示されている。整理して示せば(pp.432-433)、近代の諸特徴(特質)は次の①～④である(①は著者自身の説明を( )に入れる)。①一貫性(近代は憑依など、個人の人格や自我の消滅、複数性・多元性を認めない)、②国家中心性、③官僚制、④この世性。

しかし、これらは本書が初めて明らかにした新しいものではない。序論の注[4](pp.15-16)は「近代(modern)」についての注であるが、ここでも事典等による一般的な説明や何人かの論者の見解が紹介されており、その中には、「合理性」、「官僚制」、「世俗化」、「暴力の国家への集中」、「理性」等の語が既に出ており、これらの「近代の特質」と重なるものが少なくない。

このように、本書で述べられている近代の特質は、周知のように既に近代に関する諸特徴として一般的に指摘されていることである。しかし、そうであれば、以上の考察を通して(「シャーマニズム復興」を通して)、「近代とは何か」について明らかにすることが、本書の最終的な目的である。」ということの意味は、どういうことになるのだろうか。本書の結びの言葉は、「今後は、さらにシャーマニズムと近代の関連性についての研究を深め、近代のより深部を明らかにしていくことが、重要な課題となろう」(p.435)である。しかし、「さらにシャーマニズムと近代の関連性についての研究を深め」ることが、「近代のより深部を明らかにしていくこと」にどう繋がるのか、それが「重要な課題」となりうるのか、あるいはそもそも「近代のより深部」とは何か、近代(化)を巡る様々な議論を踏まえて、見通し程度でも示すべきであっただろう。

## II. その他

(1) 「近代」と「現代」との関係があまり明確ではない<sup>3)</sup>。説明が必要であっただろう。たとえば、『沖縄シャーマニズムの近代』における「近代」は、ユタ等の現代の状況とどのような関係にあるのだろうか等。

(2) 「霊性(spirituality)」は類出する重要な語であるが、これについての記述は第21章の注[6]にわずかにあるだけで極めて不十分である。本書では「琉球のスピリチュアリティ」(p.414)とい

う言い方さえ見られる。「霊性 (spirituality)」について説明が必要であったらう<sup>4)</sup>。

(3) 「第 13 章 ユタと災因論の変化」において、動態的観点から捉えることにより……新たな視点」(p. 201) によって考察し、災因は「特定の人物の生霊 (イチジャマ) や不特定の人物の死霊 (シニマブイ) から、自己に関係する特定の人物の死霊 (祖先) に変容した」(p. 220) こと、さらに災因を「① 衰退中」、「② 現存」、「③ 拡大中」の「三つの変容段階」(p. 209) に分けて詳細に検討している。このように災因を「動態的観点から」捉えて論じるということは、興味深い試みであると言えよう。

しかし、以上の災因の中には、一般的に挙げられる「場所 (土地) (ジー)」が抜け落ちている。たまたま備瀬ではこの考え方が出てこなかったということであろうか。

(4) 第 18 章では「心理臨床家 A を訪れたカミダリー症状がみられる 3 人のクライアントに関する事例」(p. 294) が、事例 ①、事例 ②、事例 ③ として挙げられ、検討が加えられている。しかし、「心理臨床家 A によるインタビューの記録から、カミダリー症状の特徴を考察しようと試みた。」(p. 305) と著者は述べており、そうであれば、著者は第 3 者でありながら心理臨床家 A のインタビュー記録を見せてもらい、それについて考察し結果を公表したことになる。個人情報保護、研究者倫理、医療者の守秘義務の観点から問題がないことについての説明が必要であったらう。

(5) 沖縄語について

沖縄語の意味に関する疑問点の中から以下に 4 つ挙げておきたい (『沖縄語辞典』(国立国語研究所編、財務省印刷局、平成 13 年)、『琉球語辞典』(半田一郎編著、大学書林、1999 年) 等参照)。

・「カミダリー (神垂れ/巫病)」(p. 11 et al.) と記されている。しかし、辞書では「ターリ」は「憑くこと」であり、したがって、「カミダリー」は「神がかり」であり、「神垂れ」ではない。

・「フリムン (何かに触れた者)」(p. 60 et al.) と記されている。しかし、辞書では「フリムン」は「ならず者。不良・やくざなど……馬鹿……気違ひ。狂人。ふれ者。」であり、「何かに触れた者」ではない (蛇足ながら、最後の「ふれ者」は「狂れ者」であろう)。

・「イナグヤ、イクサノサチバイ」(女が先にものを言えば戦になる)」(p. 174) と記されている。しかし、これは辞書によれば「女は戦のさきがけ、いざという時の女の勇気をいったもの。」であり、『沖縄語辞典』(内間直仁・野原三義編著、研究社 2006 年) の「イクサ」の説明中では、「女は戦争の先駆け。大昔の戦いは真先に巫女 (みこ) が相手を呪うことから始まったのでこういうといわれる」ともあり、「女が先にものを言えば戦になる」ではない。

・「フールヌカミサマヤ マササアミセーン (トイレの神様はまっとうな神様)」と記されている。しかし、辞書によれば「マササン」は「霊験がある。霊験あらたかである。」であり、「まっとうな」ではない。

## おわりに

本書は長年に亘る現地調査を踏まえて、ユタ・シャーマニズム研究と近代文化論に新しい方向性を打ち出そうとした意欲的な労作であり、大いに評価できる点も多い。特に、沖縄を中心とする現地調査とその報告は特筆に値する。その成果として、「動態論的視点を重視した通時的分析」によって、「沖縄を例として現代のシャーマニズムの様相を概観」し、最新の様々な新しい動きも視野に入れて、沖縄のユタに見られるようなシャーマニズムのダイナミックな動態を十分に浮き彫りにしている。

しかし、評者の見るところ、上で示したように、本書の目的とされている「近代化における非宗教性・合理性のもとに宗教生活は細っていくという世俗化論を否定し、それは生成・持続する

のだという近代文化論を提示」するという点は必ずしも十分ではなく、また最終的な目的とされている「近代とは何か」について特に新しい点は見あたらない。

これだけの大部な著作を一言で評するのは容易なことではないが、あえて言えば、沖縄のユタ等にもみるシャーマニズムの調査・研究は概して大いに評価できるものの、「世俗化論の否定」や「近代文化論の提示」等に関連した一連の議論は必ずしも十分なものとは言えないように思われる。

## 注

- 1) 櫻井義秀も、「図書新聞」における本書の書評で、「こうした沖縄シャーマニズムのダイナミズムを存分に描き出していることがこの本のよさである。」と述べている（「図書新聞」2012年7月7日（土曜日）第3069号）。
- 2) 『ユタとスピリチュアルケア』浜崎盛康 宮城航一 安次嶺勲 プロハスカ・イザベル、ボーダーインク、2011年参照。特に pp. 162-165。スピリチュアルケアワーカーという言い方は、「日本スピリチュアルケアワーカー協会」による。
- 3) ちなみに、著者は「今日の」（p. 11 et al.）、「現在」（p. 12 et al.）等の語を多用し、「現代」という語は意識的に避けようとしているようにも見えるが、しかし、「現代の「シャーマニズム復興」（p. 20）、「現代のシャーマニズム現象」（p. 34）、「現代的コンテキスト」（p. 39）、あるいは「現代沖縄文学」（p. 12 et al.）、「現代医療」（p. 27）、「現代日本文学」（p. 112）、さらには「近現代」（p. 27）も見られる。
- 4) なお、著者には、本書の出版以前に「沖縄のスピリチュアリティ シャーマニズム・インターネット・ローカリティをめぐって」という論考がある（「アジア遊学」（勉誠出版）84号2006年）。ここでは、スピリチュアリティについて、『現代宗教辞典』（井上順孝編）を典拠に、簡単ながら一応の説明がある。本書はこの論考の後に出版されているわけであるが、「霊性（spirituality）」についてほとんど説明がない。